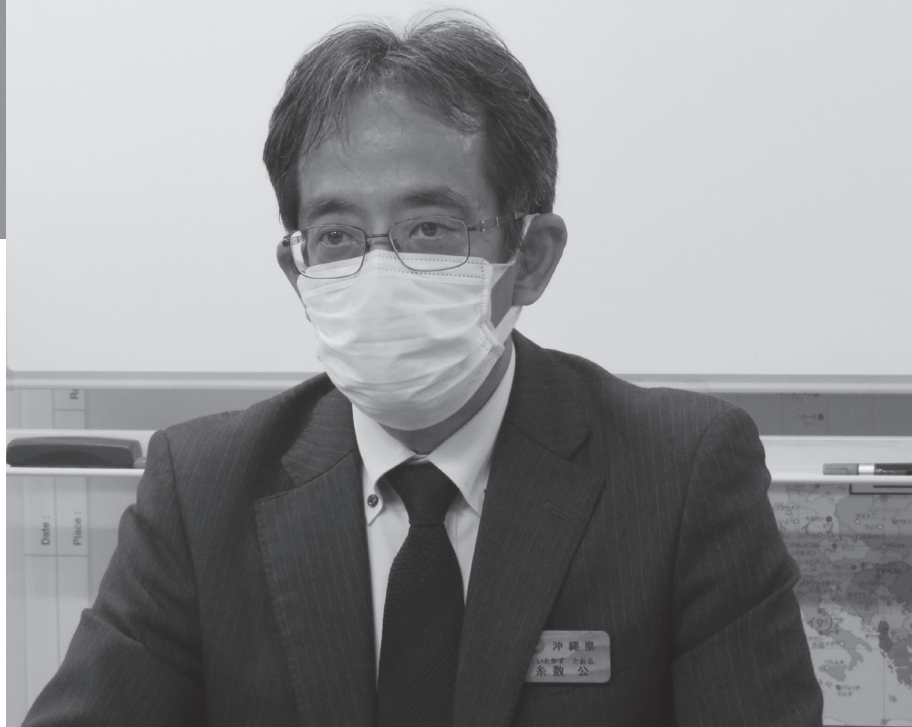


# INTERVIEW

沖縄県保健医療部 部長  
糸数 公先生



## 沖縄県の医療 —その現状と展望—

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

### 離島の実情を知り、公衆衛生の道へ

山田隆司(聞き手) 今日沖縄県庁に糸数公先生をお訪ねしました。この3年間の新型コロナウイルス感染症への対応で沖縄も大変苦勞されたと思います。記者会見での先生を時々テレビで拝見することがありました。幸い今、感染が下火になってきましたので、最先端の現場で先生が指揮をとっておられたご苦勞も含めて、今日はお話を伺いたいと思います。

まずは、先生の経歴から紹介していただけますか。

糸数 公 よろしくお願ひします。私は1966年に沖縄県で生まれ、1984年に自治医科大学に入学、1990年に卒業しました。沖縄県の13期生です。

その後沖縄県立中部病院で2年間臨床研修をした後、1992年から1994年まで八重山地区にありますが県立八重山病院附属小浜診療所に赴任しました。小浜島は『ちゅらさん』というドラマの舞台になった島です。島の人口約600名、診療所のスタッフは医師1名、看護師1名、事務職1名で、私は島で唯一の医者でした。外来は1日10~15人でそれほど多忙ではありませんでしたが、島を離れられない生活でした。この島に2年間いた後、また中部病院に戻って1年、小児科を中心とした後期研修を行いました。そのころは小児科医になろうかと思っていたのですが、次の離島が県立那覇病院附属座間味診療所

で、この島がいつまでも現役の高齢者がいる一方、島を支えるべき働き盛りの世代が未受診で病気を発症する状況があり、公衆衛生に興味を持ちました。座間味島では行事や会合で飲酒の機会も多く、ここで私はサンシンを弾けるようになりました。

**山田** 離島は飲酒や喫煙する人が多く、一方で運動もあまりしないことで結構生活習慣病の人が多いいと言いますよね。

**糸数** 診療所を受診するのは元気なおじいちゃん、おばあちゃんばかりで、診療所に来ない若い人が先に倒れるという状況だったので、そういうところに保健所が関わる必要があると思いました。

それで座間味島を出た後、公衆衛生の先輩に誘われて卒後8年目からコザ保健所に勤務しました。

**山田** 義務年限内ですよ。

**糸数** そうです。

**山田** コザ保健所に行って2年間で義務年限は終了して、その後も引き続き勤務されていたのですね。

**糸数** はい。私はコザ保健所に3人目の医師として赴任したので、希望があれば研修にも行かせてもらえるということで、東京都港区の国立公衆

衛生院専門課程に1年間、研修に行きました。2003年までコザ保健所において、その後北部福祉保健所に班長として赴任しました。そして2007年に県庁の健康増進課の結核感染症班長として赴任しました。このときちょうど新型インフルエンザが発生し、担当班長として大変な思いをしました。

**山田** 新型インフルエンザのときにも県庁で担当されたのですね。

**糸数** はい。そのあと3年間八重山福祉保健所に行き、今度は県庁の福祉保健部健康増進課の課長として赴任しました。それが2013年です。2016年までの3年間そこにおいて、2016年から2021年まで保健医療部保健衛生統括監を務め、2022年から保健医療部長になりました。来年度はどういう形になるかまだ分かりませんが、私自身は保健所長として働きたいと思って国立公衆衛生院に研修に行ったのに、保健所にはまだ所長として赴任していないので、ここが終わったら次は保健所長としてどこかに行きたいと思っています。

**山田** 行政マンとしてのキャリアが長かったのですね。

**糸数** はい、そうです。

## 沖縄の医療確保策

**糸数** 沖縄の医療について少しお話ししたいと思います。

自治医大が開学したのは1972年4月ですが、その当時沖縄県はまだ日本ではなかったので、

沖縄県が学生を派遣したのは翌年の1973年からです。1973年から2022年までに自治医大学生派遣事業に112名が派遣・修学、うち93名が卒業し、主に沖縄県で従事しています。また途中で離脱